



ABILITY

ABILITY Pro徹底攻略！

その6 個性的な歌声を作る「ボコーダー」を使ってみよう

ABILITYには新しいエフェクトとして「VocoderVST」と「VocoderSC」という2種類のボコーダーが追加されました(画面1、2)。ボコーダー自体は古くからあるエフェクトですが、プラグインとして標準装備されたのはABILITYのアドバンテージの1つでしょう。これを使えばロボットのような歌声を作ることができるのですが、その使用方は通常のプラグイン・エフェクトと様子が異なるので、予備知識がないと難しいところがあります。今回はオーソドックスな「VocoderVST」を例に使い方を解説しましょう。(文：平沢栄司)

ボコーダーって何？

「ボコーダー」は70年代に登場したシンセサイザーのサウンドを人の声のように加工できる電子楽器(エフェクター)です。似たような効果を作るギター用のエフェクトとして「トッキング・モジュレーター」と呼ばれるものもありますが、これはギターの音を口の中で鳴らして声のような響きを作り出し、それをマイクで拾うという、なかなか暴力的なものでした。ボコーダーは口の中で鳴らす代わりにマイクで声を拾い、それを基に電気的に加工することで同様の効果を再現します。

ボコーダーの使いどころとしては、単音のメロディーを演奏してロボットのような歌声にしたり、和音を演奏して独特な質感のバックコーラスを加えるといった用途が多いです。今どきのボーカル加工と言えば、極端なピッチ補正を加えた「ケロケロ・ボイス」ですが、ボコーダーの声もなかなか味があるので活用してみましょう。

ボコーダーの仕組みを知っておこう

ボコーダーのサウンドや効果を知っている人でも、いざ使うとなると「？」となるのが少なくないと思われます。というのも、他のエフェクトのようにプラグインとしてAudioトラックにインサートすればOK、とはいえないところに原因があります。

ここで、ボコーダーの機能を簡単におさらいしておきましょう。ボコーダーを利用するには楽器などの「加工される信号」と歌声などの「加工する信号」の2つが必要で、楽器の音を入力した歌声のように加工することで、あの「ロボ声」が作られます。ハードウェアのボコーダーでは楽器の信号に内蔵のシンセサイザーを利用しているので、鍵盤(シンセサイザー)を弾きながらマイクに向かって歌うスタイルで使用するのが一般的です。

ABILITYの「VocoderVST」も基本は一緒で、AudioトラックにインサートするとシンセサイズエンジンにLinPlugのアナログシンセサイザー、ALPHA3を搭載した画面が開きます。異なるのはボコーダー内蔵のシンセサイザーを弾くのは人間ではなく、MIDIトラックに打ち込んだデータとなる点と、マイクに向かって歌う代わりにAudioトラックにレコーディングした信号を利用する点です。

ボコーダーを使ってみよう

では、実際にボコーダーを使ってみましょう。そのためには「VocoderVST」本体をインサートするAudioトラックに加えて、内蔵シンセサイザーを演奏するためのMIDIトラックが必須です(画面3)。Audioトラックにインサートした後でMIDIトラックのOUTPUTの項目を開くと、InsertFXの中に「VocoderVST」があるので出力先として選択しましょう。

さて、Audioトラックに「VocoderVST」をインサートすると、レコーディングしておいたボーカルが出力されなくなってビックリしたと思います。これは不具合ではなく、信号がボコーダーの入力へと接続されたためです。もし、元の生ボーカルをモニターする必要がある時はボコーダー画面の左上にあるボタンをOFFにしてバイパスさせます。

次に、MIDIトラックにボコーダー内蔵のシンセサイザーを演奏するためのフレーズを打ち込みます。この時、一時的にOUTPUTを別のソフトシンセサイザー(例えば、通常のALPHA)に切り替えておくと、入力中のフ

レーズを聴くことができるのでオススメです。なお、入力が終わったら「VocoderVST」に戻すのを忘れないようにしましょう。

最後に、効果がわかりやすい「VocoderVST」のシンセ音色を選択します。実は、起動時に選択されている「Demo Presets 1/5th smack(vel)BT」だとうまく歌ってくれないのです。画面下段の音色名をクリックして開く画面で、例えば、「80's buttersynth(vel)BT」あたりを選んでおきましょう。効果を確認した後は他の音色も試して気に入った「ロボ声」を見つけてください。

ボコーダーの歌声を聴いてみよう

準備が整ったら、早速、プレイバック。すると、Audioトラックに録音しておいた歌声のように、MIDIトラックに打ち込んだフレーズが演奏されているはずですが、ボコーダーではシンセサイザーの音を歌声で加工している都合、音が出される条件はシンセサイザーが演奏されていて、かつ歌声が入力されている状態となります。つまり、MIDIトラックの演奏だけ、Audioトラックの歌声だけのタイミングでは音は鳴らないので注意しましょう。

MIDIトラックに打ち込むフレーズについては、先程の「80's buttersynth(vel)BT」の場合で「C3~C5」あたりの音域を目安にすると良いですね。低い音域を単音で演奏すれば、いかにもボコーダーらしいロボ声に、中高音域で和音を演奏すると、一味違うハモリが得られます。なお、選択する音色によってオクターブがズれるので、違う音色で試す時は必要に応じてフレーズをトランスポートしてください。

もう1つのボコーダー「VocoderSC」は、加工される信号として内蔵のシンセサイザーではなく、他のAudioトラックの信号が使えます。こちらを利用すれば、演奏したギターの音を声で加工するといった使い方も可能です。この「VocoderSC」については、次の機会に紹介しましょう。



画面1 ABILITYに内蔵されるボコーダー「VocoderVST」の画面。とりあえずは画面下での音色の選び方と左上のバイパスのボタンを覚えておこう



画面2 もう1つのボコーダー「VocoderSC」の画面。こちらは、加工される信号として内蔵のノイズが外部のAudioトラックを指定することができる



画面3 加工する歌声を録音したAudioトラックにVocoderVSTをインサートし、その内蔵シンセをMIDIトラックから演奏することで利用する